NPO地球の緑を守る会/〒158-0097世田谷区用賀4-34-12グリーンハウスNo.2—231号/Tel:03-5717-9358Fax:03-5717-9359/ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ http://midori.mond.jp/

フォレストニュース

植林が地球を救う
平成25年(2013)4月10日
No. 64
発行　高津啓洋

ガレキによる森の堤防づくり

3月11日・12日の二日間にわたって岩手県釜石市と大槌町を高津理事長が訪問し、復興に携わっている行政、企業、市民関係者と面談し「地球の緑を守る会」が協力できる分野について意見を交換してきました。

大槌町は、町のほぼ全域が壊滅したばかりでなく、震災時、加藤町長以下60名以上の職員が緊急対策会議をしていたところを津波が襲い、ほぼ全員が犠牲になりました。

あとを継いだ碇川町長が、このあまりにも痛ましい非劇をくりかえさないために、宮脇昭博士が提言する「がれきを生かした森の防潮堤づくり」がふるさとの町を復興する決め手となると判断、昨年4月全国ではじめて第一回目の植樹（3000本）を実施しました。

植生調査をする高津理事長

宮脇方式の防災林づくりを全国でもっとも早く実施に踏み切った自治体というところに注目し、大槌町を最初の訪問地に選びました。

11日当日、あらかじめ面会を申し込んであった市の職員に現場を案内してもらい、今後の植樹計画の詳しい説明をうけました。

大槌町の姿

その後仮設役場にもどり、緑の会でその場所に植樹をさせてもらいたい旨を伝えたところ、「がれきを埋め込んだ植樹は、メタンガスを発生させるなどを理由に岩手県が認可しておらず、特定の広さに限定した上であくまでも試験扱いという条件付きで認めてもらいました。5年間のモニタリングのあと正式認可が出るかどうかが決まります。県の認可が下りて本格的に植樹を始めるときになったら緑の会の皆さんにも是非植えていただきたいと思います」とのコメントをもらいました。

植樹現場と役場職員

理事長が追悼式に参加

「大震災津波岩手県・大槌町合同追悼式」参加しました。

大槌役場を訪問した日がちょうど震災２周年の当日であったため、仮設公民館で行われていた追悼式に参加、岩手県民5800余名の犠牲者の霊に献花をすることができました。

森の重要性の再認識を

持続的に地球で生き続けるためには、自然との共存・共栄が必要です。

この地球はどれだけのものを私たちに提供し、私たちを生かしているのでしょうか。私たちはだれでも無意識に、代金を支払わないで、ごく当たり前に、自然に呼吸をしています。もし、酸素が数分間補給されないだけで、人類はどうなるでしょうか。人体の７０％は水でできています。水が数日供給されないだけでパニックとなり、人類は死に絶えてしまいます。そして、食糧が1ヶ月供給されなければ生命を維持できません。

酸素にお金を支払う仕組みがありませんが、気づかなくても、人類やあらゆる動物が生存するために必須の「酸素」は、大気中の二酸化炭素と根から吸い上げた水と太陽エネルギーにより行われている「植物の光合成」により補給されています。

森林の大きな働きは「水の循環」や「栄養の循環」などあらゆる生物の活動の基本を提供してくれています。

そして、気候を左右する「大気の循環」も森により提供されています。わたしたちが食べる食糧のほとんどは植物です。家畜は植物・穀物を食べて生き、人間が食べる肉を提供してくれています。ところが最大限の生産と収入を挙げるためなら、明日を犠牲にして、森をつぶしてどんなことでも、やっていたのです。：ワンガリ・マータイ（ノーベル平和賞受賞）

［お知らせ］5月18日、ボランティアで大槌町「がれきを生かした防災の森づくり植樹会」に高津理事長と参加しませんか。